温

三年　画数 12
筆順　氵 氵 氵 温 温
オン　オン
クン　あたた＝か＝かい＝まる＝める

成り立ち

〝皿〟と、水をあらわした〝氵〟と、〝日〟とを組み合わせて作った字で、「皿に入れた水を、日の光にあてて〝あたためる〟こと」をあらわした字です。

〝あたためる〟→〝あたたまる〟→〝あたたかい〟といういみにつかわれます。

また、「心があたたかい」といういみで、心が〝やさしい〟こと、〝おだやか〟といういみにつかわれます。

〔旧字体は、〝溫〟。〝囚〟と〝皿〟との会意字で、「囚人に食事を与える」意味の〝盈（オン）〟に〝氵〟を加えた会意・形声字である。「心があたたかい」のが本義で、〝あたたかい〟→〝あたためる〟という用法が生じたもの。今の字体からは本文のように解いた方が分かりやすい。〕

使い方

▽冬、温かいおふろに入っていると、体が温まって、とてもいいきもちです。

▽ぼくの友だちの友子ちゃんは、とても心の温かい子です。このあいだも、すてられた子ねこがかわいそうだといって、えさをやっていました。

熟語例

▽温和（温かく和やかなこと。温かくおだやかなこと。「あの人は温和な性質で、つきあいやすい」などというふうに、つかいます。）

▽温室（草花などを育てるために、温かくしたへや。「温室育ち」というと、大事にされて育った、ひよわい人のことをいいます。）

▽温色（温かい感じのする色。例えば、赤とか黄色などです。「暖色」ともいいます。）

▽体温（体の温かさ。体の温度。「かぜをひいていたので体温をはかったら、三十八度もありました」など）

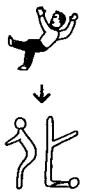
▽温度（温かさの度合。温かさの程度）

▽高温（高い温度。「日本の夏は、高温多湿で、すごしにくい」などというふうに、つかいます。）

化

三年　画数 4
筆順　イ 化
オン　カ・ケ
クン　ば＝かす＝ける

成り立ち



人がひっくりかえった形をあらわした〝匕（カ）〟に、人の形をあらわした〝イ〟をくわえて作った字で、「人がたおれて〝しぬ〟ような〝たいへんなこと〟」をあらわした字です。

「いぜんのじょうたいとはすっかりかわった〝たいへんなかわりかた〟」をあらわした字です。そういうかわりかたを〝ばける〟といいます。だから、〝花（1年10）〟は「草が〝化ける〟」という字で作られているのです。

〔〝変〟が「表面的な変化」であるのに対し、「本質的な変化」が〝化〟である。酸素と水素と結合して水になる変化を〝化合〟というのがこれである。また、質的な変化ではないが、〝化粧〟は、別人のような変わり方であるから〝化〟という。カは漢音、ケは呉音〕

使い方

▽むかし、あるお寺に、古だぬきがすんでいました。たぬきは、しじゅう、村の人たちを化かしては、よろこんでいたので、村の人たちは、こまりきっておりました。

▽ある時、たぬきは、小さな女の子に化けて、手まりをついていました。すると、通りかかった村の人が、たぬきの化けた女の子を見て、「見かけない女の子だな。いったい、おまえは、どこの子だね」と、たずねました。

熟語例

▽化石（大むかしに生きていた生きもののしがいが、石の中にのこされたもの。「化石から、古代の色々な生物の形がわかる」などというふうに、つかいます。）

▽変化（変わること。「理科のじっけんで、おたまじゃくしが、かえるに変化するまでを、かんさつした」などというふうに、つかいます。）

▽化粧（おしろいや口べになどをつかって、顔をきれいにかざること。「女の人は、お化粧すると、とてもきれいになる」などというふうに、つかいます。）